

証拠性から見た日中事態のとらえかたの違い

東京大学 楊凱榮

1. 問題のありか

言語が異なれば表現も異なる。現実の世界で起きている事態は同じでも、言語の世界でどのようにとらえるかは別問題である。これまで様々な手法による研究があり、すでに多くの蓄積がある。本発表では日中の事態の捉え方の違いの幾つかを証拠性 (evidentiality) という観点から考える。

2. 証拠性の定義

証拠性 (evidentiality) とは、情報源がどのようなものかということによって表現を変える「機能-概念本質領域 (functional-conceptual substance domain)」ことである。特定の言語構造には必ずしも依存しない。

情報源 (information source) とは、情報を話し手もしくは参加者 (participants) がどう知り得ているのかということである。

コロンビアで話されている Tariana 語は、5つの動詞接尾辞 (下記の例においてボルト体で示されているもの) を用い、それぞれ視覚・視覚を除いた知覚・一次的推論 INFERRED・二次的推論 ASSUMED・伝聞という5つの情報源を言語化している。すべての叙述において情報源の表示が義務付けられている。

Juse irida di-manika-{ka/mahka/nihka/sika/pidaka}

José football 3sgNF-play-REC.P.{VIS/NONVIS/INFR/ASSUM/REP}

‘Joséはサッカーをしていた {その様子が見えたので/その音が聞こえたので/見えた痕跡に基づけば/

これまでの知識に基づけば/そう聞いたので}’

(Aikhenvald 2004:2-3 に基づく)

2.1 情報源にかかわる意味パラメーター

Aikhenvald 2004 は通言語のデータを踏まえて、情報源にかかわる意味パラメーターを提示した。

グループ I 実証的 (attested) 情報源

FIRSTHAND: 視覚や聴覚、または自らの経験から知ること

SENSORY: 身体感覚による感知から知ること

VISUAL: 目撃から知ること

AUDITORY: 聴覚から知ること

NON-VISUAL: 聴覚・嗅覚・触覚などから知ること

DIRECT: 話し手もしくは参加者自分自身の感覚的な経験から知ること

グループⅡ 推論的情報源

INFERRED: 目撃した情報またはある出来事の結果から知ること

ASSUMED: 論理的思考または一般的知識・経験から知ること

グループⅢ 伝聞的情報源

REPORTED: 誰かの言葉から知ること

QUOTATIVE: 誰かの言葉を一言一句そのまま引用したこと

より単純化したモデルを提案しておく。

【実証的情報源】

〈SENSORY=知覚〉今天很凉快。今日は涼しい。

〈DIRECT=自らの参与・経験〉我上周去上海出差了。僕は先週上海に出張に行った。

【推論的情報源】

〈INFERRED=一次的推論〉这是他的鞋，{看来/想来}他已经到家了。

彼の靴だ。彼はもう家に着いたようだ/みたいだ/らしい。

〈ASSUMED=二次的推論〉都十点多了，{*看来/想来}他已经到家了。

もう十時すぎだ。彼はもう家に着いたらしい。

【伝聞的情報源】

〈REPORTED=伝聞〉这瘸腿的、残疾的小女孩刚一落地，她娘的献血就像血河一样奔涌而出，止也止不住，接生用的红木桶说是都让血给冲走了。

〈QUOTATIVE=引用〉自治区党委书记下厂下乡，[……]有的地市委领导知道后要来作陪，他得知后说：“你们该干什么干什么，我不要陪！”好一个“我不要陪！”

2.2 情報源表出形式（証拠性の標識）

直結型：ある一定の情報源を表す言語形式

① 文法形式 ex. 語尾・屈折・機能語など

② 語彙・構文 ex. “我听到 José 他们在踢球”

非直結型：ある一定の情報源に由来する情報にしか用いられない言語形式

ex. “应该” — 推論的情報源を意味しているか、またはそれを語源としていることが認められない。

3. 仮説

日中対照の観点から、「伝聞的情報源」はとりあえずさておき、中国語は INFERRED を「実証的情報源」と同じように言語化するのに対し、日本語は、「実証的情報源」と同じように言語化するの ASSUMED である、という傾向が見られる。

図表 1



INFERRED は SENSORY を前提とし、ASSUMED は DIRECT との類似性（かつての経験や自らの論理思考など）を有する。INFERRED を「実証的情報源」に準じて扱う言語もあれば、ASSUMED を「実証的情報源」に準じて扱う言語もあるわけである。また、「推論的情報源」は細分化せず、「実証的情報源」と同じように言語化、「伝聞的情報源」のみが別扱いである言語があっても不思議ではない。

図表 2

	情報源	中国語	日本語
他者の感情・感覚・意志（現実）	INFERRED	無標	有標
状態変化（非現実）	ASSUMED	有標	無標
天気予報（非現実）	INFERRED	無標	有標

4. 感情表現・感覚表現について

- (1)a (私は) うれしい。 我很高兴。
 b*彼はうれしい。 他很高兴。
- (2)a 彼はうれしそうだ。 他好像/看上去很高兴。
 b 彼はうれしがっている。 他好像/看上去很高兴。
- (3)a (私は) 足が痛い。 我脚(很)痛。
 b?彼は足が痛い。 他脚(很)痛。
 c 彼は足が痛そうだ。 他好像/看样子脚痛。
- (4)a *彼は寒い。 他很冷。
 b 彼は寒そうだ。 他好像很冷。
 c 彼はさむがっている。 他看上去很冷。
 d 彼は寒そうにしている。 他看上去很冷。
 e 彼は寒いと言っている。 他说他很冷。
- (5)a 你累了, 休息一下吧。

b お疲れのようで、すこし休んでください。

c?あなたは疲れたから、休んでください。

日本語では他人の感情や感覚について述べる場合、人称制限を受ける。他人の感情・感覚は他人のものであることを示す標識が必要である。それについては従来主として以下のような説明がある。縄張り説（神尾 1990）、日本語の主観性（池上 1999）、認知言語学からの説明（王安 2005）、証拠性による説明（Aoki,H.1986、李佳樑 2012）。

現実の世界では他人の感情・感覚を直接に体験できないのは日本人も中国人も同じである。ただし、言語化するときに日本語と中国語とでは異なる。

人の感情なり感覚は表情などに現れ、視覚などから情報が手に入る。中国語では自らの目で観察し、確認したことを他人に伝える時に何らかの標識を付与しなくてもよい。自分の感情や感覚を言語化するのと同じ形式「実証的情報源」を用いる。

一方、日本語では他人の感情や感覚は観察ができて、話者自身による体験とは区別し、それを伝える時には何らかの標識「推論的情報源」を付与する必要がある。

5. 動作と状態変化

動作と状態変化を表す一部の事態に関して、日中両言語において異なる方法で言語化されることがあり、中国語では状態変化に関しては述語の有標化が要求されるが、それに対して、日本語ではそうした有標化を必要としない。そのような違いは証拠性を示す手段の違いと文末形式のモダリティ性の違いに起因するものであると考えられる。

(6)a (子供は)服を着なかったので、風邪をひいた。

b(孩子)没穿衣服，所以感冒了。

(7)a 服を着ないと風邪を引く(よ)。

b 服を着ないと風邪を引いてしまうよ。

(8)a*你不穿衣服感冒。

b 你不穿衣服会感冒的。

c 我不穿衣服就感冒。(繰り返して起こる)

(9)a あそこの氷が解けた。

b 那儿的冰化了。

(10)a あと一週間もしたら、あそこの湖の氷がとけるよ。

b*再过一个星期的话，那儿的冰化。

c 再过一个星期的话，那儿的冰(就)会化掉(的)。

(11)a 零度以上になると氷がとける(よ)。

b*零度以上的话，冰化。

c 零度以上的话，冰就会化掉。

d 一到零度以上冰化。

e 一到零度以上冰就会化掉。

(12)a*这个杯子装了热水爆裂。

b 这个杯子装了热水会爆裂。

c このコップは、熱湯を入れると割れる（よ）。（=b）

d このコップは、熱湯を入れると割れてしまうよ。（=c）

(13) 動作行為（非能格動詞文） S+V+O S+V

(14) 状態変化（非対格動詞文） S+会+V [未然] 的。 S+V+了 [已然]
*S+V [未然]

動作と状態変化は異なる文法カテゴリーに属し、文法の振る舞いも違うはずである。状態変化は、変化後はその事態が確認可能であるが、変化の前は確認できないので、見込みの形で表現される。したがって、中国語では状態変化を表す場合、述語はある種の制限（動作と異なる構文制限）を受け、見込みであるということを示す必要がある。一方、日本語では状態変化であっても、何らかの標識を付与しなくても可能である。なぜ、日本語と中国語との間にこのような違いが見られるのか。

状態変化については未実現の場合は確認できず、実現後の形でしか確認できない（木村英樹(1997)。証拠性からいえば、実現済みの状態変化は「実証的情報源」によって確認できる。したがって、中国語では発話の時点において、状態変化が実現した場合は“了”を用いるだけでよい。しかし、未実現の変化について、外部観察によって変化したことを確認できないので、“会”といった見込みの標識「推論的情報源」を付与することが必要である。

一方、日本語ではなぜ状態変化について、見込みを表す標識を義務付ける必要がないのか。つまり、「実証的情報源」の形が可能であるのか。もちろん日本語でそうした証拠性を提示し、「～だろう」のような推測を表す標識を付与しても可能である。しかし、日本語の現在終止形（辞書形）を用いても話者のある種の認識を示すことが可能なのではないだろうか。言い換えれば、日本語では動詞の文末形式自体が確言ムード（寺村秀夫（1984））をもっているということである。「～だろう」と無標形式によるモダリティの違いについて、宮崎和人（2002）では無標の文末形式は「確信的な判断」を表すとしている。つまり、日本語では無標形式をもって、話者の「確信的な判断」という証拠「実証的情報源に準じた情報源」を示していると言える。

6. 天気予報について

6.1 気象予報士の場合

天気予報を報じる場合、事態としては同じであるが、それを言語化したときに、証拠性という点から見れば、日本語では「推論的情報源」を示す標識を用いるが、中国語では「実証的情報源」と同じような言語形式を用いる。

(15)a 明日は曇りのち晴れでしょう。

- b?明天大概阴转晴吧
- c?明日は曇りのち晴れです。
- d 明天阴转晴。

(16)a?夜は雨が降ります。

- b?夜は雨です。
- c 夜は雨でしょう。
- d 夜は雨が降る見込みです。
- e?夜は雨が降るようです。

(17)a 晚上有雨。

- b 晚上?大概/?好像/?看起来有雨

6.2 天気予報を聞いた人が伝える場合

(18)a 明日の天気はどう？

- b 明日は曇りのち晴れらしい/のようだ。
- c(?)明日は曇りのち晴れですよ。
- d 明日は曇りのち晴れだって。

(19)a 明天天气怎么样？

- b 明天大概/ 好像阴转晴吧。
- c 明天阴转晴。
- d 明天说是阴转晴。

(20)a 夜の天気はどう？

- b (?)夜は雨が降ります (よ)。
- c?夜は雨が降りそうです。
- d 夜は雨が降るらしい/みたいです。
- e 夜は雨が降るって。

(21)a 晚上天气怎么样？

- b 晚上有雨。
- c?晚上看上去 / ?看起来有雨。
- d 晚上好像有雨吧。
- e 说是晚上有雨。

このように、同一事態について、伝え方が異なり、日本語は有標、中国語は無標である。なぜそうなのか。また中国語では天気予報を聞いた人がそれを言語化する時には「推論的情報源」を示す標識を使うことも可能である。これらの問題についても合理的な解釈を試みる。

参考文献

- 池上嘉彦 1999. 「日本語らしさの中の〈主観性〉」『言語』1月号 大修館書店
- 王安 2005. 「現代日本語の感情形容詞における主観性の認知的考察」, 『日本認知言語学会論文集』第5巻。
- 神尾昭雄 1990. 『情報のなわ張り理論』。大修館書店。
- 寺村秀夫 1984. 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』。くろしお出版。
- 宮崎和人 2002. 「意志・勧誘のモダリティ」, 宮崎和人、安達太郎、野田春美、高梨信乃『新日本語文法選書4 モダリティ』。くろしお出版。
- 李佳樑 2012 「从内在状态在状语中的表达看汉语的示证性」. 『現代中国語研究』. 頁 43-60.
- 李佳樑 2014 『現代中国語における証拠性——情報源表出形式の意味機能——』, 東京大学大学院総合文化研究科博士論文。
- 楊凱榮 2013. 「誤用例にみる日中表現の違い」, 『日本語学』11月号。明治書院。
- Aikhenvald, Alexandra Y. 2004. *Evidentiality*. New York: Oxford University Press.
- Anderson, L.B. 1986. Evidentials, Path of Change, and Mental Maps: Typologically Regular Asymmetries. In Wallace Chafe & Johanna Nichols (eds.)
- Aoki, H. 1986. Evidentials in Japanese. In Wallace Chafe & Johanna Nichols (eds.).
- Chafe, Wallace. & Nichols, Johanna. (eds.) 1986. *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*. Norwood, New Jersey: Ablex Publishing Corporation.